

初訪問の西安では、何としても体感したいことがあった。専用車の窓から、やがて城壁や色鮮やかな電飾が望めるようになった。かつて上空から「あれはなんじゃ」と驚かされた滑走路のような構造物の、「これが側面か」と、城壁を見上げた。

ほどなく宿泊予定の鐘樓飯店の正面入口に到着。即座にその名のいわれを理解した。ロータリー道路を隔てた目の前に、夜空に色鮮やかに浮かび上がる鐘樓らしき建物が輝いていたからだ。



鐘楼に「すぐにでも登りたい」とのはやる心を押さえ、その期待でワクワクしながら翌朝の集合時刻などを決め、銘々の部屋へと別れた。この夜は、西安城のほぼ中心に位置するホテルで一夜を過ごすわけだ。この日は高安先生と相部屋。

四日目：23日（水）。4時に目覚め、ソッとひと風呂浴びて再びベッドにもぐり込んだ。7時にロビー集合。朝食は街角の食堂でとろう、との前夜の話し合いに沿って、全員でホテルを出た。目の前にそびえる鐘楼に、まだどなたも上っていないようだ。若かりし頃の己を振り返り、下村さんを誘っておくべきであったか、とフト思った。

市街の中心地にもかかわらず、人出は少なく静かだった。通勤バスや乗用車が走っているが、気ぜわしさは感じられない。どんよりした天候だったが格好の散歩となった。



城郭内は建物の高さ制限があるようだ。驚くほど広い歩道。中央分離帯も贅沢。グリーンも豊か。当地ではショッピングセンターの名称に「中心」ではなく「城」を当てるようだ。少しだが「城」という文字の、私なりのイメージが固まり始めたように感じた。真新しそうで、大きな百貨店もあった。

横道に折れると、人が吸い込まれてゆく一角が見えた。食堂らしい。その手前にまた右に折れる裏道があった。そこには電柱もあれば空中を遮る電線も残っていた。昔懐かしい光景だ。まだ手が回っていないのか、都市計画には組み込まれていないのか、それは分からない。居住地域ではないか、と感じた。



美味しそうだし、温々の食べ物が店の前で、これ見よがしに調理されている。蒸し饅頭。トーマロコシの、と思われた粥（玉米粥）。醤油と茶の葉で煮た玉子（茶叶蛋）。揚げパン（油条）。初めて見る具沢山のスープ（酸辣湯）。「あれも」と劉穎さんに次々と追加して貰いたくなる。



楽しいだけでなく、試みてヨカッタ、と思う。西安が身近になった。あの深鍋では何がとか、あの味のほども、と思に残す煮込みなどもあったが、青野菜類が少ないのがちょっと残念だった。勤労者や若い旅行者好みの食堂だろう

腹ごしらえをした上で、「それでは」とばかりに大通りに出た。脚はおのずと遠望できた大きな城門を目指す。そこには城壁との調和の為であろう、との工夫を見た。



城門にいたる手前で、地下道にもぐったが、そこはイベントの紹介場のごとし。両の壁面には、その様子をうかがわせる写真が飾られていた。



市街案内板もあった。この日の朝は曇天で、方角がわからなかったが、鐘楼から南に向かって歩いて来たことが分かった。地下道を登ればそこに永寧門がそびえている。



さらに「城」のイメージを固めることができたように思った。この西安の城壁は明王朝（1368～1644）が作ったもので、ほぼ完全な形で現存する世界最古の城壁らしい。

はるかに古い唐時代（618～907）につくられた城壁は、広さは現在の城の7倍以上で、長安と呼ばれ、世界最大の都市であった。唐の人口はおよそ5000万人、長安は世界有数の100万人「城市」であった。

日本最大の城、千代田城（皇居+外苑）の面積は約2,3km²、長安城はその36倍以上もあったことになる。現西安城壁内の広さは往年の7分の1。とはいえ皇居の約7.5倍であり、「城市」のイメージを留めている。その永寧門の内と外の外観を知った。



その内と外の外観は大きく異なっている。この外観のいずれを表と観るか、裏と観る

か。領民の目にとっていずれが表か、裏か。いずれが内側であり外側か、との思いを巡らせながら「城市」の、「城」の概念に想いをはせた。

その想いを胸に、来た道を振り返った。鐘楼が望まれた。そして鐘楼まで戻りながら、往時の人がこの石造り側の永寧門をくぐり、こうした光景を目にした時に、どう感じていたのか、とフト考えた。そして私なりに「城」の概念を解釈した、



ホテルで身支度を整え直し、忙しい1日に望むことになった。まず兵馬俑の見学。そこはとてつもなく広い大地の、見渡す限りの空間を占拠した墓地だった。





居合わせた中国人観光客の世話になって、やっと全員参加の記念撮影に収まった。2号館もあるようだ。まずトイレで老人性の心の準備を整えた。



館内に入るや「うわあー」と思った。スケールと、詰めかけた見学者に圧倒された。



細部を知り得る施設で、実に成功で緻密な作り方であったことや、発掘時（酸化され

る前)は色彩豊か(極彩色)であったことを知った。上官の像はおしなべて、今の日本でいう「成人病体質」になっていた。なぜか2000年が身近に感じられた。



第2坑の見学も済ませ、発見から今日に至るエピソードも教わった。だから、この膨大な俑だけでなく、万里の長城とか南京城のレンガまで焼いたのだから、広大な中国といえども、森林が丸裸になって当然だろう、と考えた。ミュージアムショップには、うまくすれば3人の発見者の最年少者がつめているかもしれない、と聞いた。



西安はザクロの名産地であることも知った。ザクロのジュースで喉を潤しながら、南京で味わったスイカのジュースを思い出した。スイカとザクロと言えば、エジプトでの賞味が思い出された。共にシルクロードを経て、この地にたどり着いたのだろう。

下村知範さんの提案で、空海ゆかりの寺、青龍寺訪問を組み入れていた。

803年、無名の空海は、朝廷に20年の滞在予定で私費留学僧として許され、中国に

渡りながら、2 年で帰国。日本では、逃げ帰ったかのように冷遇される。だが空海は、正統密教の師位「この世の一切を遍く照らす最上の者」を意味する遍照金剛（へんじょうこんごう）の、いわゆる大日如来の灌頂名を与えられていた。

往路の嵐で予期せぬ漂着に始まり、空海は7 カ月以上も回り道をして長安に入っており、生涯の師と仰ぐことになる清龍寺のこの恵果とは6 カ月しか触れ合っていない。だが、皇帝の師と仰がれた恵果阿闍梨は、1000 人の僧の中から空海をただ 1 人、真言密教の正当な継承者として選んでいる。後に空海は高野山に金剛峯寺を開く。

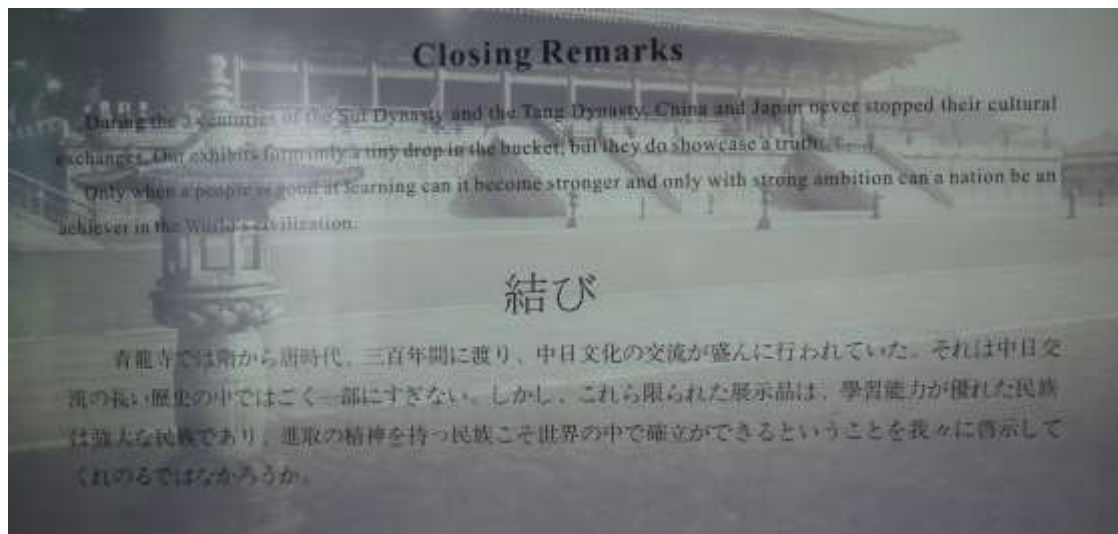
復興された青龍寺は、1000 人の僧を抱えた往年の面影はない。だが、日本の仏教界からの寄贈で、空海記念碑や恵果・空海記念堂も建っていた。



空海史迹展



とりわけ私は、この結びの言葉に心打たれた。



空海はよほど優れた人であったのだろう。それにしても、偉大なる恵果が、遣唐使の端くれにすぎなかった空海を、半年というわずかな修行期間を通して、その才能をいかにして見抜き、唯一の伝承者として遍照金剛の灌頂名を与えたのか。不思議だ。

そして今は、空海を輩出した日本と民族をたたえている。

ちなみに、空海は四国八十八カ所を開いたが、その 36 番札所は高知県にある青龍寺だ。西安の青龍寺は四国 4 県との親交を尊んでおり、ゼロ番札所となっている。



得心と熱い思いに満たされた様子の下村知範さんと連れ立て、青龍寺を後にすることになった。その時に、私は奇妙なものに目を留めて、興味津々にされた。初めて目にする「墓股（かえるまた）」であった。私はちょっとだけだが「かえる股」に詳しい。

次の訪問先は大雁塔であった。大慈恩寺の境内にある今は7重の塔だが、空海が長安で過ごす150年ほど前に玄奘三蔵がインドから持ち帰った仏典などが収められている。

今も大雁塔は随分栄えているようで、修行僧の行列にも出くわしたし、境内には観光客相手の出店がたくさんあった。故事か、あるいは伝統文化か、と思わせられる観光客相手のオブジェもあり、楽し気であった。「なるほど」これも流行る由縁ではないかと、観光客に迫るゴミの分別廃棄のあり方（この旅で初めて見た）4分類や、景観への配慮（大雁塔を望み、写真に収めようとして気付かされたもので、避雷針と見た鉄柱を樹木で見事にカモフラージュして、美観と安心感を調和させていた）を見た。



大慈恩寺は、観光客だけでなく、熱心な信者でも賑わっているようだ。というのは、拝観ついでの参りをしてはあまりにも熱心、と思われた参拝者がいたからだ。



だがすぐに、それは浅薄な観察眼であったようだ、と思い直している。敬虔で、純粋な心の持ち主には、迫りくる何かが感受できるに違いない。



と思いながら、私は 56m もあるという塔にはのぼらずに、見あげるにとどめた。





陽は傾いたが「まだ、間に合いそう」と思った。何としても体感してから帰りたい宿題が残っていた。その昔、機上から「あれはなんじゃ」と驚いた構造物を、まだ体感していなかった。だから、帰途の専用バスの中で、劉穎さんに要望した。「どうしてそこまで」といった反応だったし、他の方々も乗り気ではなさそうだった。それだけ余計に皆さんと共に体感したくなった。

夕闇迫っていたが、西安の都市「西安城市」の南門・永寧門が視界に入った。次第に、私が思う外観が迫った。城市は、イザッという時は跳ね橋で外敵から守ったわけだ。



高さ 12m の城壁を、はやる心を押さえながら、のぼった。



これが、この旅での第3の願いだった。まるで滑走路のごとし、との印象を、体感できた。キット皆さんも、登ってみてヨカッタ、と思ってもらえたはずだ。すぐに帰ろうとする人はなく、めいめいそれなりに楽しんでおられた。

長安の都を建設する以前はどのような大地であったのか。この城壁を築く土は、どこから持ってきたのか。レンガはどこで焼き、その燃料はどこで調達したのかなど、思いを巡らせた。木を切り、運河をうがち、その土を活かして、運河は100万の民を養うための食糧輸送になどと、はるか昔に思いを馳せた。



どうしてかくなる城壁をつくり、内と外を隔てなければならなかったのか。平安京は、唐の時代の長安の都を真似たと言われるが、城壁がなかった。その後、日本も城や城壁を発達させるが、その概念は同じではなかったわけだ。今頃になって実感した日中の様々な差異も振り返り、「来てみてヨカッタ」と思った。



城壁にうがたれたトンネルを通りぬけ、城市に踏み込み込んだ。北に向かって南大街（地下鉄2号線の路上）を進めば、鐘樓にいたる。「やっと帰り着いた」との安堵で心が安らいだ。ホテルはその左手前、南西の角にある鐘鼓飯店だ。そこまでならまだ歩く元気が残っている。



鐘樓の側には、地階に導く階段あって、降ると地下鉄2号線の駅に至る。その壁面に西安の市街図などがあった。この鐘樓からさらに北に進めば、と地図を眺めた。運河が東西に城市を横切っている。そして北門が一番立派なようだ。あるいは鐘樓から東や西にむかって進めば、それぞれ大きな門がある。



次に目を広域図に転じると、北門を出て、さらに北へ進めば、大きな川が八の字に流れており、城市のある一帯を北の外敵から守っているように見える。川は城市と比較してみれば、相当の幅がありそうだ。

唐時代の長安城市は、現在の西安城市の10倍近くも巨大であったわけだから、一帯を発掘すれば様々な遺跡が出てくるに違いない。現実には、いたるところでそれらしき動きが認められる。それだけに、「この運河を渡りたかった」「大河も観たかった」「せめて北門を巡りたかった」などと考えながら、夕食に備えた。



夕食は、地下レベルに下るオープン階段で鐘樓前の広場に下り、その広場の一角にあった商店街に踏み込んだところのレストランでとった。さまざまな餃子を味わった。中国では正月のご馳走として餃子が振る舞われる、と留学生から聞いたことを思い出した。



広場は帰途も同じように賑わっていた。泊るホテルと鐘樓が共に視界に入った。明朝

は何としても鐘樓に上ろうと思い、仲間を募った。



最終日・24日(木)。雨が降っていた。妻に、赤いパーカーや折り畳み傘を持たされていたが、「役に立った」と報告できる、と喜んだ。午前中はショッピングを楽しみながら市中をうろつき、14:35 出発の便で西安の咸陽空港を立ち帰国、となっていた。

「それでは」と、岡田さんとホテルの玄関に降りた。鐘樓にのぼれば、中国が目指す都市改造の方向、国づくりの方向を推し量れそうに見えていただけに、心が躍った。



鐘樓の外壁沿いの石段を登れば、1階部に至る。その一角に大きな鐘があった。目を南西に転ずると泊ったホテルが目に入った。このホテルでは顔認証は目視で済んだ。はやる心で天蓋のない回廊を巡った。得心し、2回目の周回で撮影。



まず、南の最短距離にある永寧門を望んだ。次いで、右回りに周回した。



西の安定門は、緑に遮られて屋根の一部しか見えないが、手前右手に大きな歴史的建造物が望めた。「時間があれば、訪ねたい」と思った。

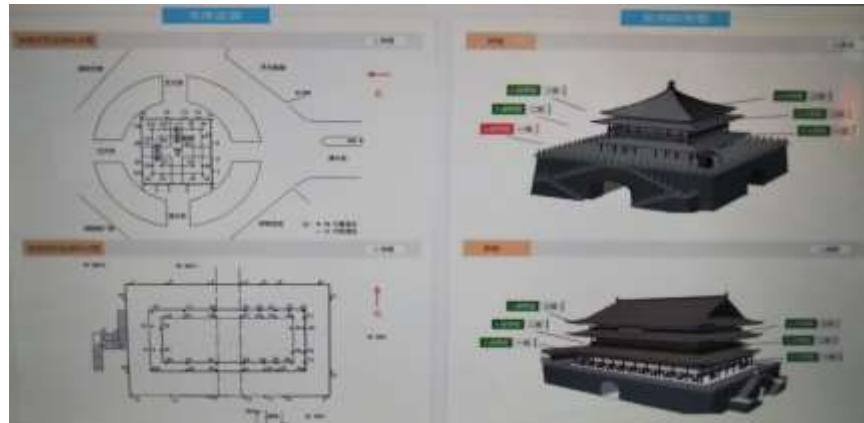




4つの方角を望み、都市計画の意図が、願うところと一致していそうだと知った。歴史を尊び、未来世代に誇りだけでなく、観光資源としても引き継ごうとする意図を感じとった。

上階があった。そこは展示スペースでもあった。





時間があれば、と願った先も確かめたが、鼓楼だった。ホテルの前にあった方は大鐘を備えた鐘楼で、こちらは大太鼓で時を知らせる鼓楼であった。

それにしても、なぜこうも近くに、鐘と鼓に分けて時を告げさせたのだろうか、と2つの鐘と鼓の楼の存在に興味を惹かれた。その使い分けや、合奏にも



ホテルに取って返し、最後の日、ショッピングの半日となった。劉穎さんは鼓楼の方向に6人を引率した。「なんと」鼓楼は、まるでイスラム街の入り口ともいえる位置を占めていた。回族と呼ばれる人たちが暮らす一帯であり、そのメイン通りは、とても賑やかな商店街で、大慈恩寺の出店で買い忘れたような品々を取り扱う店まであった。皆さん、目の色を輝かせてお土産あさりの一時を楽しんだ。



この旅で見た最も画数の多い漢字もあった。ナツメの干した実は10階級ほどあった。



大きく中国は変わりつつある。この旅ではついに、市街で1度しか電線のクモの巣を目にせず、この電線も切断されており、早晚撤去されそうだ。

咸陽 14:35 出発ー関空 18:55 着。そのまま平夫妻は東京へ。残念ながら、集合写真は撮れなかった。帰宅すると、干して出た柿とハッピーに出迎えられた。よい旅であった。

